武蔵野市第六期長期計画・調整計画策定委員会（第23回）

■日時　令和５年11月22日（水）　午後７時～午後９時18分

■場所　オンライン

出席委員：渡邉委員長、木下委員、久留委員、古賀委員、鈴木委員、中村委員、
箕輪委員、吉田委員、伊藤委員、恩田委員

欠席委員：岡部副委員長

１．開　　会

委員長が開会を宣言し、企画調整課長が委員の出席状況と配布資料について説明した。

２．議　　事

（１）答申案について

企画調整課長が、資料１－１「答申案 Ver.3.0（履歴あり）」に基づき、答申案 Ver.2.0からの修正点について説明した。また、計画案に寄せられた意見に対する策定委員会の考え方の公表にあたり、各委員の内容確認が終了したので確定していると現状の報告をした。

【委員長】　まず、答申案について。

【Ａ委員】　平和・文化・市民生活分野の修正について特に異論はない。もともとの意見を上げてくださっていた方にも確認していただいたので、安心してこの表記で出せる。

【Ｂ委員】　子ども・教育分野も特に異論はない。皆さんにたくさんご議論いただいたおかげで、このような形にまとまった。委員と事務局の皆様に感謝申し上げたい。

【委員長】　私が集中的に確認した前半部分についても、特に問題はないと思う。

それでは、答申案 Ver.3.0 を策定委員会として市長に答申する。なお、11 月 30 日の市長への答申までに誤字脱字等の、内容面に関わらない軽微な修正は正副委員長及び事務局に一任願いたい。

〔「異論ありません」と呼ぶ者あり〕

【委員長】　次に、意見表について。これも最終的には策定委員会として公表することにつき、承認願いたい。なお、答申案と同様、誤字脱字等の軽微な修正は、正副委員長と事

務局にご一任いただきたい。

では、ご異議ないようなので現行案で取りまとめ、11 月 30 日に市長へ答申し、12 月 1 日に市ホームページ上で公開する。

（２）調整計画策定に関する振り返り

①次期長期計画策定に向けた課題

企画調整課長が、資料２「次期長期計画策定に向けた課題」に沿って説明した。

【委員長】　第七期長期計画の策定に向けて今後議論していただきたい点について、ご意見をいただきたい。なお、議論の形式等については、②の振り返りで行うこととする。

【Ｃ委員】　調整計画はこれから少なくとも４年、最長５年間は走る。その５年間では白黒つけられないので繰り越すことを挙げるのか。それとも、超長期の課題で、５年間でも取り組んだうえで、早い変化に合わせてアップデートしていかなくてはいけないことを挙げるのか。

後者の観点では、行財政分野にＤＸへの対応を入れておくべきである。調整計画でやってしまえば、あとは問題なく流れていくというものではない。引き続きアップデートを継続していかないといけない。また、今回、公民連携の推進についてかなり書き込んだが、具体的なものについて武蔵野市は何ら検討が進んでいない。個別計画の中で検討を進めていくということであっても、今後の課題として書いておくほうがいい。一方、「女性職員のキャリア形成支援」は個別計画で包括的・多面的かつ詳細に書いて、慎重に考えないといけないということで残したが、これだけ書いても仕方がないようにも思えるので、個人的には「女性職員のキャリア形成支援」は落として、ＤＸを入れたい。公民連携の推進は、個別計画がまだなので、入れてもいいと思う。

【委員長】　資料２は、六長調で既に論点となったが残ったもの、継続的なものが含まれる。例えば、都市基盤分野に「都営水道一元化」が入っている。今回の答申案にも入れているが、調整計画期間中に終わることではない。今後も継続的に議論し、第七期の計画策定でも議論の在り方を考える必要がある。そういった特出しするものがこの資料に載っている。

ＤＸに関しては、持続的かつイノベーティブに対応することが求められる。また、公民

連携推進は、書いたものの本格的な実施等については何も動いていないので、七長以降で考えていただきたいと述べることに全く問題はない。
【企画調整課長】　事務局も、委員長のおっしゃるとおりの理解である。あくまで次の計画まで何もしないということではない。この間、個別計画で検討するものもある。この資料は、次の計画策定への引き継ぎとして整理した。

【Ｃ委員】　都市基盤分野に「道路ネットワークの最適化」を追加したほうがいい。調整計画の期間内では終わらないうえに、外環道路の完成が見えてくると、外部環境は大きく変わる。既存の道路施策よりもジャンプアップした新しい道路ネットワークを検討しなくてはいけないと思う。

【Ｄ委員】　都市基盤分野で、吉祥寺エリアについて、市民意見としていろいろな論点が出された。吉祥寺らしさや、病院について、イーストエリアの浄化、パークエリアの再整備などである。これまでのＧ委員のお話のとおり、一朝一夕に終わることではないので、吉祥寺について特出ししてもいいのではないか。

【Ｅ委員】　健康・福祉分野から都市基盤分野まで「担い手不足」が入っている。健康・福祉分野は人材確保を政策課題に挙げているが、人口減少に伴う生産年齢人口、労働力の減少は全部にかかる話である。「担い手不足」について、どう整理しようとしているのか。
【企画調整課長】　ここでは、あくまでこれまでの意見交換の中で出た「担い手不足」というキーワードを各分野に落とし込んだ。
【Ｅ委員】　健康・福祉分野は、老人クラブや日赤奉仕団などの地域活動の担い手不足だけでなく、健康・福祉業界の専門人材の担い手不足も深刻だという捉え方をしている。

【委員長】　武蔵野市の人口は人口推計上は微増だが、市の周囲は人口減少が本格化する。特に、七長策定時には確実に高齢化が進む。高齢化する中における市政や市の産業のあり方は、専門的な人材も含め、第七期長期計画の重要な論点になる。
　また、外国人、外国籍の方々、日本国籍を持っているが日本語を母語としない方々も増える。そういった方々へのより本格的な対応は、ＤＸを進めれば何とかなるという話ではないので、七長策定時には全体を貫く大きいテーマとして考えていく必要がある。

【Ｆ委員】　給食費の無償化について、議論で長い時間をとったが、次の段階の議論を尽くせていない。子どもたちにかける予算の枠をどう確保するのか。市の教育の予算の中だけではなく、どういう範囲でやっていくか、七長でも議論していただけたら良いのではないか。

コミュニティについて、コミュニティセンターの担い手や、コミュニティセンターを今後どう活用するのかをコミュニティセンターだけに任せるのではなく、市と協働してコミュニティ全体の再構築をする時期ではないか。

ＤＸが進んだときに、公文書はどこまでを記録し、何年保存するかという道筋を既に立てていると思うが、十分理解されていない。それを明確化できたらいい。

市民自治の進め方を発展させて、市民が成果を実感できるような参加型予算をつける試みへの検討がなされたら良いと思う。

【Ｃ委員】　市民自治のあり方は重要な論点である。私は先ほど「公民連携」という言葉を使ったが、「公民連携」という概念は「官民連携」よりも広い。行政体にさらに市民が参加することを言い、市役所は市民とどう協働関係をつくり、市民にどう市政参加を促していくのかということも踏まえている。

【Ｄ委員】　Ｆ委員がおっしゃるコミュニティセンターについては同感である。

公立小学校、中学校の魅力づけのようなことが論点に挙がってもいいと思う。

【Ｂ委員】　公立の小学校、中学校のあり方は、学校改築の話の中にも出ているが、どういう学校であったらいいのかについて既に市は子どもたちの声を聞くということを始めているようである。今回、中高生の声を聞く場を設けていただいたが、子どもの権利条例ができて、さらに子どもたちの声を聞いていこうとしている。日本全体では子どもは減っていくので、子どもの声は小さくなっていく可能性がある。今後の担い手である子どもたちの声をどう拾うのかということは、七長でも引き継いでいただきたい。

【委員長】　ドイツでは、市民参加型予算で子どもが市政に参加している。

【Ａ委員】　平和・文化・市民生活という分野が非常に広かったという印象を受けている。

第五期、第四期のときも、この分野を担当した委員が苦労されたと事務局の方に伺った。分野を平和・文化と市民生活に分けてもいいのではないか。
【委員長】　分野を今後どう考えていくのかという点は重要である。健康・福祉分野と子ども・教育分野では、子どもの障害関係をどっちにどうするかということになりやすい。平和・文化・市民生活分野の産業や防災に関してはどこに位置付けるべきなのか等もある。分野のあり方・構成は全体に関することとして七長等で議論をお願いしたい。

【Ｂ委員】　子ども・教育分野の基本施策１と２の内容がかなり混ざっていて、どう区別したらいいのかがわかりづらかった。乳幼児期に関しても、幼稚園と保育園で書かれる場所が違う。児童福祉か学校教育かで保育所か幼稚園かが分かれるが、市民は、どうして同じ年齢の子どもなのに書かれるところが分かれるのかという感覚を持つのではないか。

【委員長】　七長策定に向けての論点はこれら以外にもたくさんあると思うが、以上を第六期長期計画・調整計画策定委員会として集約し、伝えるべき事項とする。
【企画調整課長】　事務局としても、しかと受けとめ、次期策定委員会に引き継ぐ。

②第六期長期計画・調整計画策定の振り返り

企画調整課長が、委員会・作業部会及び各種意見交換会の開催回数を振り返ったほか、今回の計画策定の特徴的な点として、資料のペーパーレス化、オンライン傍聴、市内視察、会議形態、広報について説明した。

【委員長】　事務局からの説明のとおり、１年３カ月にわたり、委員会、作業部会、意見交換等、策定委員会全体で 42 回の会合を持って議論した。各委員から、六長調策定を振り返り、ご意見を賜りたい。

【Ｅ委員】　私は、六長のときから関わらせていただいた。42 回の策定委員会以外にも福祉分野の計画の策定委員会を３つほど掛け持ちしており、自分が関わっている個別計画のことは、それなりに理解ができて進み具合もわかるが、自分が関わっていない個別計画については、どんな議論がされているのかよくわからなかった。武蔵野市は相当な数の個別計画の策定委員会が動いており、調整局面のルールも決まっていない。それを長計の策

定委員会の中で議論しようとして、各担当課との調整は企画調整課で行うべきこととしても、事務方に負担をかけてしまった。

また、今回、分野をまたがる課題、特に、子ども・教育分野の医療的ケア児の問題や、妊娠前のことについて調整が必要になったが、この整理、対応の仕方にもルールがないために、やはり間に入る市の担当の方々にご苦労をおかけした。また、タイムラグが生じないよう直接担当委員と話していいものかどうか、戸惑った。

【Ｂ委員】　私は今回初めて参加させていただいた。また、第２回が終わったところからの途中参加だったために、長期計画の調整計画だということはわかりつつも、武蔵野市がどう進めているのかを十分に理解できないまま、始まってしまった。皆様にかなりご迷惑をおかけすることになり、特に事務局の方には随分サポートしていただいた。

委員長にはこれだけの議論をまとめていただいたことに感謝している。ほかの委員にもたくさんサポートやアドバイスをいただいたが、議論をどう進めていくか、委員としてどこまで意見を述べていいものなのかという難しさを最後まで感じていた。ようやく慣れてきたころに給食費のことが出てきて、最終的に、委員として責任を持って、こうしてほしいと言い切ることができなかった。そのため、皆さんにご相談をさせていただく形にして、時間をとってしまったのは申し訳なかった。

また、分野をまたがることがあるときに、担当委員とどのくらい直接相談していいものなのか、自分の中で明確に進められるとよかったというのが私自身の反省である。次の委員の方も、同じようなところで難しく感じられるのではないか。

正直、回数がとても多かった。回数を重ねたからこそ、これだけ議論ができたのだが、家庭の状況によっては、この回数を委員として参加することが難しい方もおられるのではないか。ＤＸでオンラインということをもっと考えていけるといいと思う。

【Ａ委員】　回数の多い委員会を見事な手腕でまとめられた委員長にお礼を申し上げたい。委員長の委員会の回し方は、私にとって大変勉強になった。

私が申し上げたいことは、Ｅ委員、Ｂ委員がおっしゃっていたこととほぼ一緒である。回数が本当に多い。委員の打診を受けたときの記憶がないのだが、おそらく「大丈夫ですか」と聞いてくださったと思う。それでも、自分の生活とのバランスが崩れるなどした。次の委員の打診のときには、これだけ回数があるということを何度も伝えていただきたい。

また、前回の策定に関わって武蔵野市方式を経験した委員から事前にレクチャー的なものがあるといい。ペースや踏み込み方など中々わからなかった。３回目くらいまでは、委員会後に今後の流れのレクチャーがあるといい。

ＤＸをますます進めていただきたい。

私は、他分野にどれぐらい踏み込んでいいのかがわからなかった。例えば、市民から、障害が弱いのではないかという意見が出たが、私の専門的な立場から意見を言ったほうがいいのか、担当委員のお考えがあるからあまり口出しするべきではないのかという部分がうまく酌み取れなかった。横の連携を促進する工夫がもう少しあってもいいと思う。

武蔵野市方式は、大変だが、これこそ行政の計画のあるべき姿である。勉強になった。ただ、タウンミーティング的に市民の意見を伺う回が何回もありながら、毎回来てくださる方が同じだったので、より多くの方に参加していただけるような工夫が必要だと感じた。

【委員長】　緑・環境分野は副委員長がご担当だが、本日ご欠席のため、資料３をご覧いただくことでかえさせていただきたい。

【Ｇ委員】　私は、調整計画の策定からの参加で、不慣れな中、責任の重大さを感じることが多かった。武蔵野市に 65 年住んでいても、市政のことも、近隣の様子も知らないことだらけだったが、各種資料を読んだり、歴史を調べたりして、ほかの市町村の動向にも関心が持てた。

長期計画と個別計画の間に隔たりを感じた。それでも環境デザインが専門の私には都市基盤分野はやりがいがあって、自分ならではの視点も発揮できたと思う。私の苦手な分野については、専門の先生の知見がすばらしくて、教わることばかりだった。

委員長の会議のさばき方は、人間わざとは思えないぐらい見事だった。

分野区分はおおむね妥当だったと思う。ただ、財政は全ての分野に関わるので、「行財政」ではなく、財政だけで独立させたほうがいい。横串という議論があったが、その横串の１本が財政である。

市民や議員との意見交換会は、私は非常に楽しかった。熱心に勉強されている市民の方がいた。一方、議員の方々に対しては、もう少し幅広く施策を研究したうえで提案してほしいと思ったこともあった。

施策評価に取り組むのはいいが、武蔵野市の中だけで評価をしようとしている嫌いがあ

る。もっと総体的、総合的、相対的に把握する必要があると思い、武蔵野市の位置付け、立ち位置を理解できる物差しとして、都市基盤関係の数量的な国交省データと東京都の都市計画公園台帳などを提供した。
俯瞰的、達観的な視点に乏しい。既成事実を積み上げたボトムアップの手法だけでなく、トップダウン的な視点も必要かもしれない。都市基盤分野は、難しい問題を後回しにして、具体的進展がないまま検討が長期化している案件が多い。長期計画であまり具体的なディテールに言及すると、それが個別計画にリミッターとして働いてしまう可能性がある。長期計画は理念的な部分に特化し、個別計画は、長期計画における理想論的観念をどのように具体化・最大化できているか知恵を絞る場面にする。

一方、長期計画が最上位計画といいながら、個別計画がきちんと長期計画を意識して立案されてその趣旨が長期計画に沿っているかどうかをチェックする総合的視点がない。進行中の個別計画を最初に一つ一つレビューして、長期計画からのフィードバックを個別計画に反映する仕組みが必要である。調整計画は長期計画の見直しではなくて、個別計画のレビューと方向性の確認・修正に役割を変えてもいいのではないか。

このことに疑問を持ったきっかけは、松露庵の廃止可能性の言及、市営プールの更新における屋外プールの存続問題、学校の統廃合の要否の検討、境公園の都市計画、水道の一元化、３駅の駅前の再開発である。多くは都市基盤の問題で、内容が専門的であり、考慮しなければいけない前提条件や必要条件が多いため、新鮮な発想が出ず個別計画でも無難な妥協的な案が多く感じる。都市計画マスタープランや緑の基本計画などの法定計画のほかに、公共施設等総合管理計画、東京都の都市計画や上下水道計画などの調整が必要で、解決が難しいことだからこそ、当事者間だけで議論して課題をブラックボックス化するのではなく、適切な専門家を入れて、課題解決型の検討を行ったほうがいい。

また、その予算が不明で、財政計画に織り込まれていないという問題もある。概算数値でもいいので、財政検討において金額を括弧書きにしたうえで項目立てをしたほうがいい。

境公園については、何回か問題を指摘した。戦前の内務省による都市計画決定を、戦後に東京都がそのまま引き継いで、用地買収も何もせずに武蔵野市に都市計画決定だけ放り投げた責任は東京都に大きい。ただ、現時点では、境公園の問題は武蔵野市の専決事項だ。個別計画の都市計画マスタープランの一つの項目としてではなく、独立した問題として検討すべきである。

女子大通りや水道の一元化は、東京都の主体事業なので、市は東京都との調整が必要だ

が、長期にわたって目に見える形での成果が上がっていない。個別計画の中の一事項ではなくて、特別プロジェクトを立ち上げて推進すべきである。

担当部局の皆さんは、都市基盤の更新にあたり、合理的判断と予算の制約の中で水準の高い機能を満たそうとする意識が高い。パブリックコメントやアンケート調査も説明責任を果たす手続として不可欠だが、新しい施設を丁寧につくることと同時に、古い施設を「丁寧に葬る」姿勢を忘れないでほしい。都市基盤は「思い出をつくる場所」でもある。何らかの施設を葬る際には、その施設の生い立ちと果たした役割を集計し、評価する。具体的な意見の積み重ねから、「そこが大事だった人もいるんだ」という、他者を思いやる気持ちが働くようになる。使わないから関係ないという人が多い施設が淘汰されるのは、文化の多様性を望む方向とは相入れない。合理的機能論だけで都市基盤を考えてはいけないと思う。都市は生き物である。やむを得ず廃止するのであれば、どれだけの人にどのような働きをしてきたかを評価・リスペクトした総合的な施策が不可欠である。産み出し方と葬り方を同時に考えることの積み重ねが歴史感覚になっていく。

私は４～５歳で杉並から西久保三丁目に引っ越してきた。自分の育った場所が、住みたいまちから、永く住みたいまちになったらいいなと思う。

【Ｃ委員】　私は、委員長、副委員長だけでなく、事務局にも本当に感謝申し上げたい。

調整計画は、長期計画からの軌道修正をすればできるのではと思っていたが、武蔵野市という地域は、狭いながらも、住んでいる方たちの多様性、思いの複雑さがあり、課題がたくさんあった。さらに、後段においては政治的混乱が入ってきたこともあり、最後の最後まで気が抜けない展開になった。

私は、次の人たちに引き継ぐにあたり、極めて大事な哲学的なことを確認したい。

１つ目は、市職員へのリスペクトと、市職員が協働パートナーであるという認識を、市民と市のステークホルダーの共通認識に高めなくてはいけないということだ。武蔵野市の職員は、地方公共団体職員の中でも極めて優秀な人が多い。私たちの生活は日々この人たちの献身のもとで確立されている。市役所職員を公僕のように言う上から目線の人たちがいるが、これは大きな勘違いである。行政を高度化し、私たちの生活をよりよいところに持っていっていただくには、市職員にご活躍いただくしかない。確かに、市職員と意見が合わないことはある。私も合わないことが多々あった。だが、それは自分の専門性と行政職員としての専門性のずれであって、どちらかが上でどちらかが下ということはない。武

蔵野市をよりよくしてもらうための協働パートナーが市職員だということを武蔵野市の文化として広めるぐらい、私たちは頑張ってきた。七期長期計画において行財政分野を担当する方は、そういう概念をもう一度見詰め直して、新しい計画の策定にあたってほしい。

２つ目として、策定委員会の役割と責務について、早い段階で委員のコンセンサスをつくる必要がある。策定委員になった後で、「あなたたちの責務はこれ」と言われても困ると思う。私も国の審議会委員をしていたが、武蔵野市の策定委員会は、その責務、自分に係る業務負担が桁違いに重い。極めて難しい判断もする。武蔵野市の先達は、民主主義の二元代表制だけに任せるのではなく、それを補完する策定委員会なるものを構築した。それを武蔵野市は 50 年以上も継続している。この委員を担うというのは軽々にできるものではない。今回、正直言って六期長期計画をやっていた委員と、新しく参加いただいた委員とで何を共有すべきかという引き継ぎがうまくいかなかった。策定のポイントは討議要綱である。ここで論点をできる限り入れて、皆さんからの意見を聞いて、出てきた論点をもとに計画案をつくるのだが、ここで検討不足だったところが最後まで議論が収れんし切れず、結果的に大変な思いをすることになったと思う。

３番目は、市民目線に基づく政治的中立性の中で物事を考えていかなくてはいけないということだ。この視点に立ち戻れば、いろいろな問題が出たときも、おのずと解は見出せる。哲学的なコンセンサスがないまま、個別に出てくる課題をその場しのぎで考えたとしても、策定委員会に求められる役割と責務は果たせない。

４番目として、今回、事務方の工夫もあり、圏域別意見交換会と市役所職員からのアンケートの回答数の増加があった。しかし、増えているからいいということにはならない。これをやったら確実に増えるということもない。引き続き、泥くさい努力と工夫をするしかない。

５番目は、市長と市議会議員との意見交換会についてだ。私は大変勉強になった。彼らとは、もっと時間をかけて、怖がらずに建設的な議論してもよかったのではないか。一問一答では議論が発展していかない。松下市長が、計画案に関する意見交換で、時間超過しながらも議論に応じてくれたのは大変ありがたかった。かみ合わない議論もあったが、ちゃんと時間を割いてくださったことで、私も市長のお考えと、それを踏まえて策定委員会の中でどう考えるべきか、自分なりの回答が得られた。

行財政分野は、かなり意欲的な計画になっている。至らない点は山ほどあったが、少なくとも自分が今持てる能力は全てつぎ込んだという自負はある。同時に、私の知る限り、

行財政分野にとどまらず他分野も踏まえて、ここまで先進的に、各種要素を多面的に考えて取り込み、市民目線を忘れずに、新しいことにも踏み込んだ行政計画は、ほかの地方公共団体で見たことはない。実行するには山があるし、難しさもあると思うが、ぜひこの計画実施に向けて、市職員の皆さんと、策定委員会が終わっても、できる限り現場で頑張っていきたい。せっかくつくったすばらしい計画だ。その実現に向けて引き続き取り組んでいっていただきたい。

【D委員】　まず、運営について。策定委員会は、委員同士の議論が主目的なら、ロの字型にして、委員同士の議論が深まるような形に変えてもいいのではないか。扇形だと、議論が放射してしまう。

市長・議員との意見交換会について。市長も議員の方々も、市民の意見を多く扱って、よく地域を知っている。より意見交換ができる場にしたほうがいい。特に、議員の方から「〇〇についてどうお考えか」、「どう議論されているか」と質問されて、意図がわからないことが多かった。そうではなくて、「こう考えるが、どうか」、もしくは「市民からこう聞いているが、どうか」という意見交換ができたほうがいいと思う。

市民意見交換会について。かなりの人数が参加していることに驚いた。私は 10 年ぐらい住んでいるが、１回も参加したことがなかった。関係団体別は圏域別等よりも多くの人が集まっていたので、関係団体別の回に来ていただいた方に、より市民意見交換会にも参加いただけるよう促してはどうか。また、副委員長の意見にもあったように、コミセンでのオンライン配信やチャットによる質問を受け付けることで、より関心が高まると思う。

公募委員について。ふだんの生活ではほぼ出会わない言葉が多く、「フレイル」、「8050 問題」等インプットに時間がかかった。公募委員にはなじみのない言葉が多いので、最初の段階で、議論になりそうな点を個別に、こんなことが議論になって、こんな専門用語があるというキャッチアップの時間をあげるといい。

個人的には思ったことをいろいろ言わせていただいたが、例えば市民意見交換会に来られた方々のように、これを長期計画にどうしても盛り込みたい、記載したいということがあるわけではなかったので、委員としてどれだけ存在感を出せたのかは、反省を含めて疑問に思っている。市民意見交換会にいらっしゃる方は分野担当の委員の方とのやりとりを希望していると思って、市民意見交換会では発言しなかった。次回の公募委員の方々には、市民意見交換会にどういう役割で臨んだらいいか、アドバイスしてあげるといいと思う。

その他、市民委員の募集方法について、たくさん声を上げていただいて、その中から何人かになっていただけるように、母数を多く獲得することが大事だ。市報だけでなく、関係団体に告知したり、チラシをつくって「応募しませんか」ということをしてもいいと思う。前回委員ということでインタビューも受けるので、お声がけいただきたい。

最後に、約 30 回、子どもを２人同行させていただいた。各委員のご配慮と、保育も含めてご対応いただいた事務局の方々に心よりお礼申し上げる。彼らがいつか、小さいころ、市役所に通い続けていたことを思い出しながら、地域のリーダーとして活躍できるようになればいいなと思っている。６歳と２歳のときから１年間、市役所に行くのを毎回楽しみにしていて、誰よりも市役所のことが大好きな２人に、今後もこんなことがあってということを都度言っていければと思っている。

【Ｆ委員】　公募市民委員として初めて行政の議論の場に立ち会わせていただいた。各分野の専門の委員の方がいらっしゃる中で、公募市民委員の立ち位置と、どう参加していったらいいのか、初めはかなり戸惑いを感じたが、どうにか最後まで来られたことに安堵している。

策定委員会の日程と内容について。第五期長期計画、第六期長期計画、今回策定した計画の冊子は、市民が見ても、どこが違うのかわからないのではないか。今回はダイジェスト版ができて大分改善されたとは思うが、その３冊を例えばＩＴなどで、重複しているところを全部削り、策定委員会の冊子の何%が新しく変わったか、何%が残っているのかを一回考えてみても良いと思う。

今期の六期の調整計画の後、５年間をやっていく中で、横軸を通しながら、これがトピックだというビジョン、「推し」が、わかりやすく伝わる方向性を考えるのも良いと思う。

市は LINE などで色々な工夫をされているようだが、ウェブの参加が思ったより増えないのは、市民が自分から情報を取りに行かないと見えてこない部分があるからだと思う。中野区はバスの中で広告を出している。市民が自分から情報を取りに行かなくても、行政は今こんなことをやっているということがわかるような情報発信の仕方を考えていただきたい。

ヒアリングは、２回目で大事な点のディスカッションを深められた一方で、1 回目との共通部分も非常に多かった。議論する時間を長く持てるような工夫ができたらよかったのではないかという印象を持っている。

市民の皆様との意見交換で、提案された事柄や問題を解決するためにどうしたら良いのか、限られた範囲でしか対応できなかったこともあったが、策定委員会に参加させていただいて、論議を尽くすことができて、私にとって市民自治を実感できる非常にかけがえのない時間になった。行政の基本事項に疎く、私の発言はあちこちに飛んだりしたが、専門分野の委員や職員の方に忍耐と寛容で対応していただいたことに心から御礼申し上げる。とりわけ委員長には、拙い発言を取りまとめていただいた。私はそれで安心し、励まされて、どうにか最後までくじけずにこられた。心から感謝している。

武蔵野市の宝、推しは、やはり武蔵野市方式にあると思う。その実績を支え、長年継続してきたのは、市民だけでなく、市内在住・在勤の職員の皆さんだと思う。

【H委員】　約１年半にわたり、42 回の会議にご参加いただき、感謝申し上げる。

私は、第五期長期計画・調整計画のときに企画調整課長だった。現課長が係長で、委員長にはそのときから委員としてご参加いただいている。そのときと比べると、圧倒的にＩＣＴ化は進んだと思う。ＤＸはこれからも引き続き、Ｄからスタートして Ｘの部分の視点を持ちながら七長はどうしたらいいかを考えていきたい。

今日皆様からいただいたご意見はもっともなことが多く、さらに改善しながら、いい長期計画の策定をしなければいけないと思っている。第五期長期計画のときに長計条例をつくり、そこで我々職員も議員も市民も、長計の役割を改めて重く感じて、長計で議論したうえでないと実行できないという流れに変わっていった。長計条例の第２条第４項には「市が実施する政策は、すべて長期計画にその根拠がなければならない。ただし、速やかな対応が特に必要と認められるものは、この限りでない」とある。コロナ対策が「速やかな対応」として実施するものに相当したが、長計という縛りがある中で、今回、給食費無償化の話については様々ご意見をいただいた。我々が論点出しをするタイミングは２年前になる。そこから社会情勢がどんどん変わり、この４年スパンでつくる長期計画にエッセンスだけでも載せたいという焦りがあったのは事実で、そのやり方は大いに反省すべき点がある。ふだん我々行政はスピード感がないと言われる中で、いかにスピード感を持って事業を実施するかということも考えながら、長期計画を大切にする武蔵野市としてどのような形で盛り込んでいけばいいのかをもう一度考えていきたい。

策定委員の皆様には、役割や責任が年々重くなり、大変申し訳なく思っている。七長に向けてはしっかり説明する必要がある。

個別計画については、私は、個人的には、長計があれば最低限でいいと思うが、今、個別計画がたくさんある割に、策定の期間も違っていて、長計に基づいてつくる個別計画もあれば、タイミングによっては個別計画を長計でオーソライズするものもある。個別計画のあり方も考えていかなければいけない。

Ｃ委員には、市の職員にお褒めの言葉をいただいたことにお礼申し上げる。行財政分野は、かなり宿題をもらった。専門的な知見や技術を持った民間の人の職員への採用、官民協働の視点、職員が現場に積極的に出向く機会をつくり、長期計画を実行する。計画の策定過程で策定委員の皆様、そして市民意見交換会に出た意見、議員との意見交換も踏まえて、副市長として、計画に基づいた事業が進められるよう頑張りたい。

【Ｉ委員】　策定委員は市民あるいは議員と直接的に意見を交換する。その立場は、役割として非常に重い。これは 50 年間、計画策定は市民自治の武蔵野市方式で進めてきたという経緯の中でお願いしていることである。ただ、策定委員には市民であることや専門の学識であることなどの条件があり、50 年続いている武蔵野市方式を今後どのように形成させていくかという、これから抱えていく課題もあると認識している。

個別計画と長期計画は、整理されているようで、一つ一つをとってみると非常に複雑で難しい問題を抱えている。特に、個々の事業の補助金や交付金は計画がないと受けられないものもあるため、計画がどうしても増えてしまう。それらを整理するには、個別計画の中から議論する必要のあるエッセンスを抽出し、市民あるいは議会と意見交換を行う中で、将来どうあるべきかを長期計画の策定委員会で議論しなければならない。

一方、結論を導かないで先延ばしになっているところについては、今後は各分野で、到達点を見据え、長期計画とリンクしながら議論することが大事である。

私は、第六期長期計画のときも副市長という立場で参画させていただいていた。市民の目、議員の目、武蔵野市に期待される部分を非常に感じている。今後ともこの長期計画・調整計画の施策事業に真摯に向き合い、財政計画とともに取り組んでいきたい。長い間、議論いただいたことに感謝申し上げる。

【委員長】　私は、今回は委員長としてだが、伊藤副市長が企画調整課長をされていた第五期長期計画・調整計画のときから３回目となる。毎回いろいろなことが変わっていることを実感したが、しっかりと議論しながら計画をつくることについては変わっていない。

オンライン参加をはじめデジタル化対応を積極的に進めたことは、確実に変わった。その分、問題も随分露呈した。職員は対応を頑張っているのだが、運用レベルが高いとは言えないことがあった。しかし、それは職員の対応能力の問題というよりは、そもそも市役所がそのことを前提にした形になっていなかったということが大きい。デジタルの可能性を生かす方法は何があるのかをより積極的に考え、職員の努力だけで解決するのではなく、システムとして解決することをぜひ意識していただきながらやっていただきたい。

これまで２回の策定委員会では私にも担当分野があったが、委員長には担当分野はない。その中で私が意識したのは、武蔵野市方式による実質性を伴った議論を担保しながら、しっかりとした熟議を進めるということである。私も専門性があるし、市民の皆様にも専門性があるが、市民として話す。専門性があると、その専門性の壁を守ろうとする動きになって、時には変わることを止めてしまう。市民による熟議で重要なのは、議論をしながら発話している本人が変わっていくということである。専門性を持った市民が議論するというこの枠組みは、非常に大変だが、重要だと思っている。

ただ、できるだけ議論をしていただこうと思うあまりに、ほとんどの回で時間が延長した。これは今後のワーク・ライフ・バランスを考えるうえでも問題である。議論を効率よくすることは難しい。効率化できる部分が何なのか、考える必要がある。様々なご事情がある中で市民が策定に参加するのだから、両立できるような策定のあり方については常に考え続けなければいけない。

もう一点、今回は、評価の仕組みを入れるという非常に重要なチャレンジをした。ただ、第六期長期計画が始まってまだ１年半ほどの時期に、不可能に近いことをやろうとしたので、第七期の長期計画の前にしっかりと評価してほしい。策定委員会の中で評価し、さらに計画策定するには、時間的に非常に厳しいものがある。評価をしたうえで、策定をどのように考えていくのかという点は、今後の課題である。

第一期の 1970 年代は、経済成長で、未来志向が言いやすい時代だった。経済が大きくなる中で、一からつくり、成長するパイを分ければよかった。これからは人口が減少し、日本経済は周辺諸国のようには進まなくなる。未来は明るいとは言いにくい時代に計画をつくらなければいけないことになる。担い手不足もあり第七期はますます難しくなっていくと思う。それでもこれまでの経緯をリスペクトしつつ、何かを断念しながら、大事なものを守っていく中で熟議を重ねいってほしい。我々はそれをやったつもりでいる。新しい市長のもとで、この計画をぜひ尊重して実行していただきたい。

皆様に支えていただきながら、委員会運営ができたことを私としては本当にありがたく思っている。策定委員、事務局、関わった議員の方や市民の方々、全ての皆様に厚く御礼申し上げる。

部長からは、最後にコメントを求めるつもりでいたが、課長のコメントもいただきたい。

【企画調整課長】　昨年の８月に設置されて、意見交換も含めて 42 回ということは、平均すると月３回弱の会合が開かれたことになる。おかげで令和６年度から我々が進む道、レール、何を目指していくかが定まったと思う。

事務局としては、どれだけ市民参加を厚くするかが課題である。意見交換にたくさんの方が来たとのご意見をいただいたが、本来なら、11 人いる策定委員の何倍もの人に来ていただくべきだと思っている。どうしたらここが広がっていくのか、これからも考えていかなければいけない。策定委員の皆さんには、答申を終えたら策定委員としての役割は終わるが、ぜひ次の計画で、一市民の立場からご意見を出していただきたい。そうしないと広がっていかない。

ＤＸは、やってきたつもりではあるが、まだまだである。例えば、地域生活環境指標は、つくるのに相当の労力がかかっており、思い切って冊子はやめてデジタル化し、地図情報を重ねて新たに見えてくる課題を追求することを今、事務局は考えている。次期策定委員会では様々なデジタル技術を活用してやっていきたい。

【総合政策部長】　課長とも重なるが、まずはこれだけの回数、大変な労力を割いていただいたことに感謝申し上げる。

今回の計画策定は、コロナの話から始まった。これほど地域生活に多大な影響を与えたことはない。対応に要求されるスピード感もすさまじかった。そういう中でこの委員会は、これまでの議決事項を前提にした調整計画でいいのかという議論から始まったと私は記憶している。

最後には、学校給食費の無償化があった。行政の施策には、政治的なものを含めてうねりのようなものがある。しかも今の時代、さらにスピード感を増している。それをこの計画行政の中でどうするのかということを考え、悩みつつだったが、皆さんには、しっかりした計画を策定いただいた。本当にありがたいことである。

今後に向けてということでは、何人かの委員から、完成度が高いというお話があったが、

次の時代に向けての過渡期でもあると思う。大事にしていかなければいけないもの、変えていかなければいけないものがある。個人の意見で、ここを変えたほうがいいと言うのではなく、みんなで考えていく。そのときに一番大切なのは計画をつくる人、実行する人だと思っている。市民の方々からも、議員の皆さんからも、何より策定委員の皆さんと本当に密度の濃いやりとりをさせていただいた。そこが職員にとって貴重な経験になっている。お褒めのお言葉もいただいてありがたい限りだが、経験が、次の市政を担う職員の財産になる。その部分を私は一番感謝しながら、次の計画にしっかりつなげていきたい。

【委員長】　②「第六期長期計画・調整計画策定の振り返り」については以上とする。

（３）その他

企画調整課長が、答申の日時と議事録の確認について案内した。

【Ｅ委員】　前回の長計から比べると、デジタル化が進んだことを実感する。今回はタブレットの中に全部入っているが、前回は物すごい量の紙を処分するのが大変だった。タブレットを返してしまうと、中に蓄積されたものは手元に残せないのか。

委員会の最初のほうで行政評価制度の案について議論した。スケジュールを見ると、第七期の前に行政評価制度による評価を行うことになっている。次期長計は、この評価をしっかりやって臨んでいただくことが大事である。

【企画調整課長】　ご自身でメモを入れたデータは、ご自身のパソコンなりハードディスクに移すことができる。その方法は後刻ご案内する。

行政評価制度は、今回の反省も踏まえ、来年度から早速取り組むべく、予算編成の中で既に検討を進めている。

【委員長】　moreNOTE は使いにくい。メモを残したものは各自でダウンロードせざるを得ないが、それ以外について１個１個ファイルをダウンロードするのは膨大な手間と時間がかかる。簡易にダウンロードをする方法を早めに共有いただきたい。

以上で本日の第 23 回の策定委員会を終了する。

策定委員会は 11 月 30 日に市長に答申し、答申は 12 月１日に公開される。その後、議会で行政報告等がなされ、４月から動く。委員会終了後もお見守りいただきたい。

最後に、傍聴に積極的に参加した皆様にも厚く御礼申し上げる。

委員長が、委員会の終了を宣言し、武蔵野市第六期長期計画・調整計画策定委員会を閉じた。

以　　上